

最優秀賞受賞にあたって

新潟県燕市立燕南小学校

やまぐちてつし

山口 哲史



この度は「第37回東書教育賞最優秀賞」という過大な評価をいただきました。大変光栄であるとともに、喜びでいっぱいです。審査してくださった先生方、東京書籍の皆様、本当にありがとうございます。

今回の実践は、当たり前が当たり前でないコロナ禍だからこそ、当然のように行われてきた行事や活動の意味、人と関わる意味について考えることができました。「どうしてみんなで何かをしたくなるのか」「どうして人と関わりたくなるのか」そんな疑問が、自然と子どもたちの中から生まれてきました。また、最高学年である6年生にとって4月当初から運動会や縦割り班活動等、リーダーとして活躍できる機会を奪われたことは大きな損失でしたが、通常なら多忙な6年生の1学期を、じっくりと総合的な学習の時間に当てることができたというよい側面もありました。実際、制限が多く自由に遊べない中で、休み時間に「元気づけ隊」の活動に打ち込む子どもたちの姿が多く見られました。

コロナ禍で修学旅行の行き先も変えなければなりません。しかし、旅行先を変更したことで、公務員や福祉施設の方だけでなく、遊園地やホテルの方、新潟水俣病の語り部さん等、様々な人から話を聞くことができました。子どもたちは多様な「関わりの価値」に触れ、自分の経験と重ねながら、関わりについて自分なりの考えを作ることができました。

コロナ第二波が来ても子どもたちは諦めず、計画を見事に修正して実行しました。高齢者とのリモート交流会で、私は現地の高齢者施設でカメラ係をしていたのですが、学校にいる子どもたちから映像が送られてくるその部屋は、とても温かい雰囲気です。「自分にはこの雰囲気は生み出せないな」と感心しました。また、デイサービスに送ったメッセージは、感動して涙を流したスタッフの方もいらしたとのこと、卒業に際してスタッフの皆さんから寄せ書きをいただきました。大人の私でなく、子どもたちが精一杯考えて行動したからこそ、心を動かすものがあつたのではないのでしょうか。コロナ禍の中、子どもたちは自分たちにしかできない方法で、地域の人たちを元気づけることができました。現実的な壁に何度もぶつかりながらも、諦めずに目的を達成したクラスの子どもたちを誇らしく思います。

最後になりましたが、この実践を行うに当たって協力していただいたゲストティーチャーの皆さん、地域の皆さん、地域の方と繋いでくださった地域コーディネーターの田中喜代子先生、本実践を前向きにとらえ、温かく見守ってくださった燕南小学校の大井玲子校長先生はじめ職員の方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。